

(Report on the Symposium of MSJ Fall-Meeting 2002)
New Research Aspect of the Pan-Okhotsk Region

Haruo OHNISHI

(Corresponding author) *Sapporo District Meteorological Observatory* (Present address ; Osaka District Meteorological Observatory)

(Received 7 April 2003 ; Accepted 12 May 2003)

Contents

1. Toshihiko KIKUCHI : Archaeology of the trading in the pan-Okhotsk region.
2. Kay I. OHSIMA : The east Sakhalin current and sea ice.
3. Yoshio ASUMA : Explosively developed cyclones around the Sea of Okhotsk and their role in transportation of water vapor.
4. Hisashi NAKAMURA : The cool Sea of Okhotsk and the atmospheric circulation variability.

305 (環オホーツク海；セイウチ)

1. 考古学からみた環オホーツク海交易

菊池俊彦*

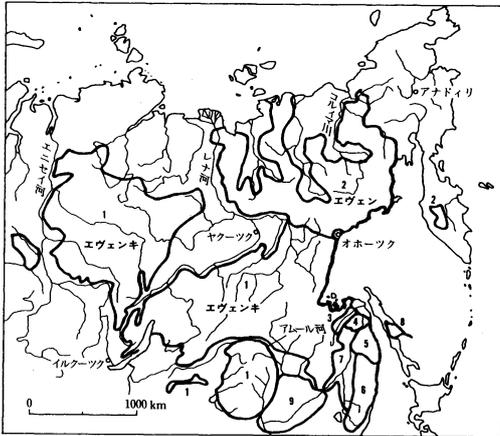
1. はじめに

ロシア人は16世紀末、1581年にウラル山脈を越えてシベリアに進出してから、17世紀に入ると瞬く間にシベリアを東に横切り、わずか50年余りで、1639年にはオホーツク海に到達し、また1648年にはベーリング海に出た。シベリアにはさまざまな民族が居住している。19世紀後半から20世紀初めにかけての東シベリアの先住民の分布を見ると、大きく分けて、ツングース諸民族が広汎に居住し(第1図)、古アジア諸民族はアジアの端に住んでいる(第2図)。

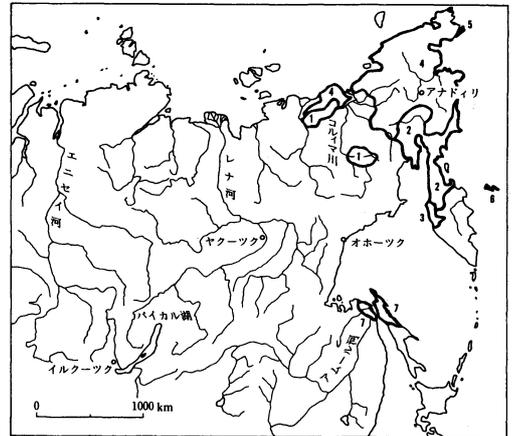
オホーツク海の北岸、カムチャツカ半島の北半部の

コリヤーク自治区とその周辺地域には少数民族であるコリヤーク民族が居住している。その全人口は1989年の統計では8,942人である。1950年代中葉からかつてコリヤーク民族が居住していたマガダン市周辺とその東方地域で考古学調査が行われ、新石器時代・鉄器時代の遺跡が発掘された。これらの遺跡とその出土遺物の文化複合はコリヤーク民族の古代文化を示すものとして、古コリヤーク文化と呼ばれている。それらの遺跡のひとつ、マガダン東方のスレドニヤ湾南西岸の集落跡の住居址から1枚の銅銭「皇宋通宝」(第3図中の1)が発見された(Vasil'evskij, 1971)。それは中国で北宋(960-1127年)の宝元2年(1039年)から15年間、鑄造された貨幣である。中国の貨幣は遙か遠いこの地域にどこから、どのようにしてもたらされたのだろうか

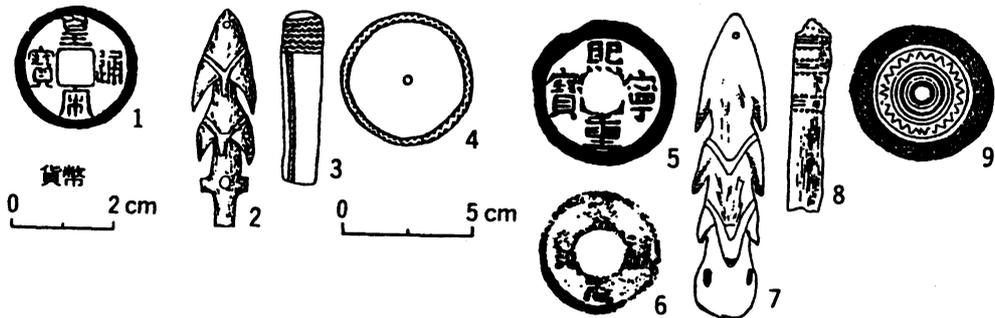
* 北海道大学大学院文学研究科。



第1図 ツングース諸民族の居住地域。1. エヴェンキ民族, 2. エヴェンキ民族, 3. ネギダール民族, 4. ウリチ民族, 5. オロチ民族, 6. ウデヘ民族, 7. ナナイ民族, 8. ウイルタ民族, 9. 満洲民族。



第2図 古アジア諸民族の居住地域。1. ユカギール民族, 2. コリャーク民族, 3. イテリメン民族, 4. チュクチ民族, 5. エスキモー民族, 6. アリュート民族, 9. ニヅフ民族。



第3図 古コリャーク文化とオホーツク文化の遺物の類似。1～4. スレードニヤ (古コリャーク文化), 5. オンコロマナイ, 6. モヨロ, 7. 東多来加, 8. 遠節良音間, 9. 船泊砂丘 (以上オホーツク文化)。

か。

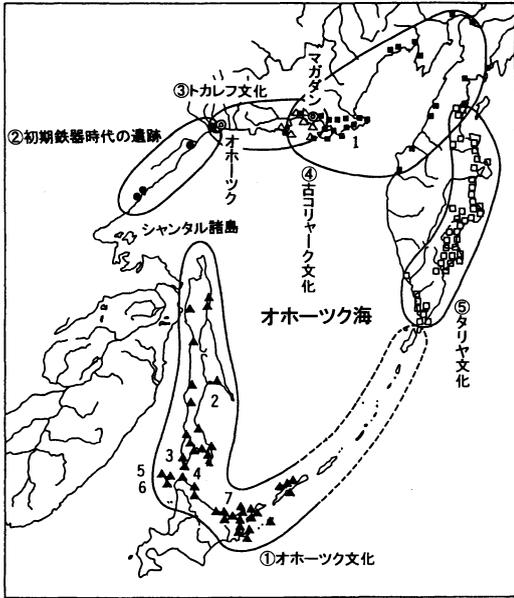
2. オホーツク文化

北海道のオホーツク海沿岸の稚内から根室半島に至るまで、また稚内に近い礼文島と利尻島にはオホーツク文化の遺跡が分布している(第4図)。このような遺跡はサハリンでは南サハリンから北サハリンに至るほぼ全域にあり、また千島列島にも国後島、択捉島から北千島に至るまで発見されている。日本海沿岸では天塩川河口までで、それ以南では天売島・焼尻島・奥尻島のような島にだけ発見されている。オホーツク文化の遺跡は沿岸部にしか無く、また遺跡からは魚骨のほか、アザラシ・オットセイ・トドなどの海獣の骨が大

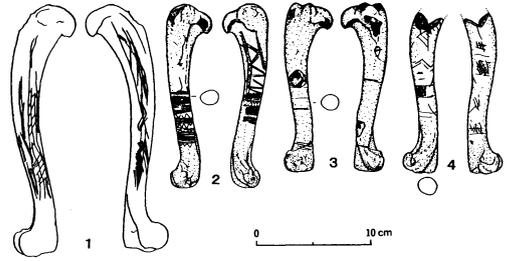
量に出土することから、オホーツク文化の人たちは沿海の生活者だったと考えることができる。農耕の痕跡はなく、陸獣の骨も少ない。

オホーツク文化には中国の松花江流域の同仁(どうじん)文化(紀元後5～10世紀)、アムール河下流域の靺鞨(まつかつ)文化(紀元後4～9世紀)や女真(じょしん)文化(10～13世紀)の遺跡から出土する土器・鉄器・青銅製品と共通、あるいは類似している遺物が多く、そのことはオホーツク文化の人たちが大陸側の人たちと交流があったことを示している。オホーツク文化の年代は、これらの大陸の諸文化との対比から、3・4世紀から13世紀と推定されている(菊池, 1995)。

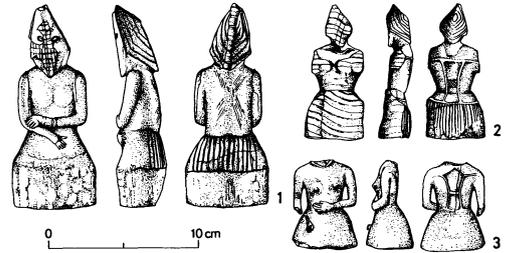
オホーツク文化の遺跡からは北宋銭が2枚発見され



第4図 オホーツク海沿岸の諸文化 1. スレドニヤ, 2. 東多来加, 3. 遠節良音間, 4. 稚内オンコロマナイ, 5. 礼文島船泊砂丘, 6. 礼文島香深井, 7. モヨロ.



第5図 犬の装飾上腕骨, 1. ウイカ, 2~4. 礼文島香深井.



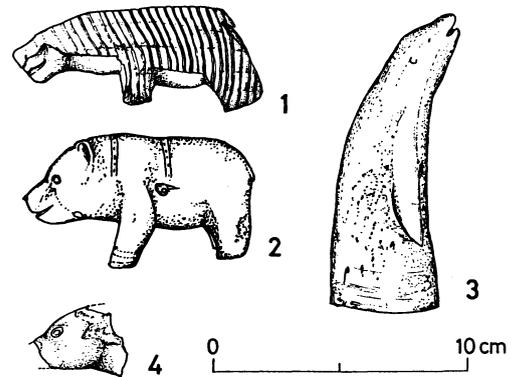
第6図 オホーツク文化のセイウチの牙製婦人像, 1. 礼文島船泊重兵衛沢, 2. 礼文島浜中, 3. モヨロ.

ている。稚内市オンコロマナイ貝塚からは熙寧重宝(1034年初鑄)が(第3図中の5), 網走市モヨロ貝塚からは景祐元宝(1034年初鑄)が採集されている(第3図中の6)。アムール河下流域の女真文化の遺跡からは多数の北宋銭が発見されているので、まさにこれらの北宋銭は中国からアムール河下流域へ、そしてサハリンのオホーツク文化の人たちの所にもたらされ、次いで北海道に運ばれて来たとしてよいだろう。

3. オホーツク海北岸の諸文化

オホーツク文化の土器や骨角器とよく似た遺物がオホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡(1~10世紀), オホーツク海北岸のトカレフ文化(紀元前5~紀元後5世紀)や古コリャーク文化(5~17世紀)の遺跡から見出されている(Lebedintsev, 1990)。これらの遺跡からはアザラシの骨が多量に出土しており、海獣狩猟が盛んだったことを示している。オホーツク文化の遺跡からはクジラの骨が見出されるが、古コリャーク文化の遺跡にも多数のクジラの骨があり、これらの文化の人たちは沿海の生活者だったことが分かる。

マガダン東方のスレドニヤ湾の住居址からは、特徴的な紋様の付いた骨製の銚先・針入れ・円盤状の装



第7図 オホーツク文化のセイウチの牙製動物像, 1. 礼文島上泊, 2~4. 湧別町川西.

飾品(第3図中の2~4)が出土している(Vasil'evskij, 1971)。それらとよく似た遺物はオホーツク文化のサハリンと礼文島の遺跡から出土(第3図中の7~9)している(菊池, 1995)。両者は偶然の一致とするにはあまりにも類似しており、そこにはオホーツク文化の人たちとオホーツク海北岸の人たちとの間に何らかの交流があったであろうことを窺わせている。

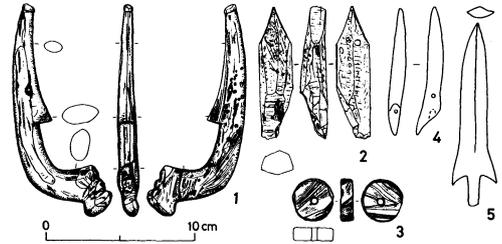
オホーツク文化はどんな人たち、いかなる民族が残した考古学上の文化だろうか？ これにはアムール河下流域の民族がサハリン・北海道に進出したとか、サハリンのアイヌ民族だろうという説があるが、私はこれをニヴフ（旧称ギリヤーク）民族だったろうと考えている（菊池，1995）。またオホーツク海北岸のトカレフ文化と古コリヤーク文化人たちはコリヤーク民族だったろうとロシアの考古学者は考えている（Vasil'evskij, 1971；Lebedintsev, 1990）。

アムール河下流域に4～9世紀に靺鞨文化が、10～13世紀に女真文化があったところ、おそらくサハリンのニヴフ民族のなかにはオホーツク海北西岸を北に出掛け、またコリヤーク民族のなかにはオホーツク海北岸から北西岸を南下して来た者がいて、両者は接触し、そこに交流があったのではないだろうか。上述の骨製品と装飾品の類似はその例証と言えよう。またオホーツク海北岸のスレドニヤの「皇宋通宝」はそのようなニヴフ民族とコリヤーク民族の接触の結果、ニヴフ民族からコリヤーク民族の手に渡ったと推測されるのである。

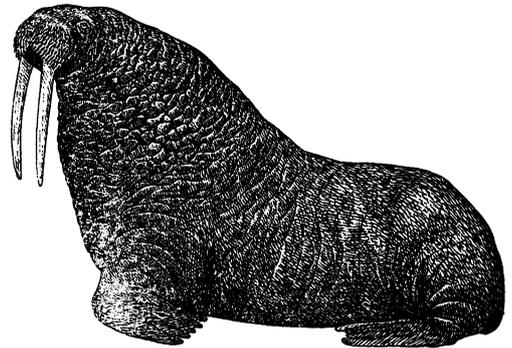
オホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡のうち、シャンタル諸島に近いウイカ遺跡からは装飾の刻まれた犬の上腕骨（第5図中の1）が発見されているが（Lebedintsev, 1990）、これと同様の犬の上腕骨がオホーツク文化の礼文島香深井遺跡から3点（第5図中の2～4）出土している（菊池，2001）。この初期鉄器時代の遺跡を残した人たちがどんな民族だったのか、それはまだ分かっていない。しかしながらこれも民族の交流を窺わせる資料である。またニヴフ民族はコリヤーク民族をハプテと呼んでいたという記録がある（菊池，1995）。すなわち、ニヴフ民族はコリヤーク民族を知っていたのである。

4. 海象（セイウチ）の牙製品

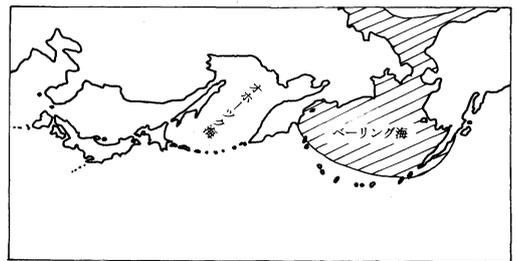
オホーツク文化の遺跡から女性を表現した牙製の彫刻品がこれまでに11点発見されている。それらは牙製婦人像と呼ばれている。それらの多くはマッコウクジラの歯から作られているが、3例は海象（セイウチ）の牙を素材にして作られている。2例は礼文島の船泊重兵衛遺跡と浜中遺跡から、1例は網走のモヨロ貝塚から出土（第6図）している（大塚，1968）。そのほか、海象の牙から作られたクマヤシヤチの動物像の彫刻品が礼文島上泊と網走に近い湧別町川西の遺跡から出土（第7図）している（大塚，1968）。また礼文島香



第8図 オホーツク文化（1～3）と古コリヤーク文化（4・5）のセイウチの牙製品 1～3. 礼文島香深井, 4・5. ナヤハン.



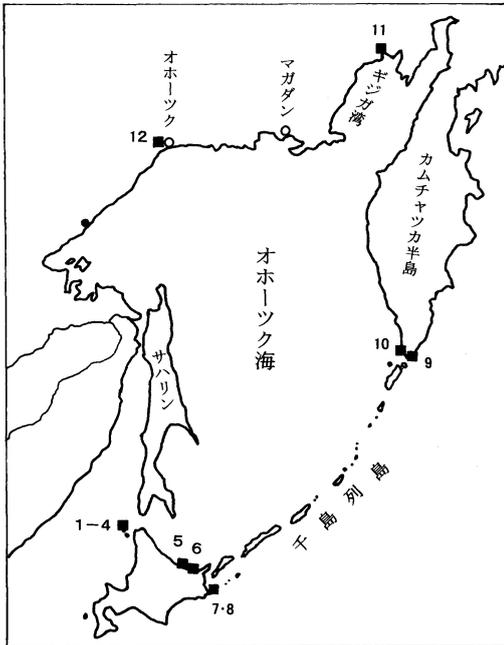
第9図 セイウチ.



第10図 セイウチの棲息域.

深井遺跡から出土した釣針・銚先末製品・円盤状の未製の装飾品（第8図中の1～3）も海象の牙から作られている（菊池，2003）。このようにオホーツク文化の遺跡からセイウチの牙製品が知られている。

しかしながら問題はそれらのセイウチの牙をオホーツク文化の人たちはどこから手に入れたのか、ということである。セイウチ（第9図）（西脇，1965）が棲息しているのは北氷洋で、ベーリング海峽より北であり、冬になって北氷洋が氷に閉ざされると、セイウチはベーリング海峽から南に下りて来る。しかしながらアリューシャン列島を南に越えることはない。カムチャ



第11図 セイウチの牙製品と牙・骨の出土遺跡
 1. 礼文島船泊重兵衛沢, 2. 礼文島浜中, 3. 礼文島上泊, 4. 礼文島香深井, 5. 湧別町川西, 6. モヨロ, 7. トーサムポロ(牙), 8. オンネモト(牙), 9. ロパトカIII(牙製品), 10. リャプーヒナ(牙), 11. ナヤハン, 12. クフトゥイVIII(骨).

ツカ半島東岸でも中部沿岸が南限(第10図)である(ジェファソン他, 1999)。

カムチャツカ半島では南端部のロパトカ岬のロパトカIII遺跡から海象の牙製の装飾品が出土している。またその近くのリャプーヒナ遺跡からは海象の牙が2点出土している(菊池, 2003)。ただし放射性炭素による年代測定では前者は4,380年前、後者は3,050年前であり、これらはタリヤ文化(4,000~3,000年前)に属する遺跡であるから、オホーツク文化よりずっと古い年代である。オホーツク海北岸のギジガ湾の古コリャーク文化に属するナヤハン遺跡から海象の牙製の銛先が出土している(第8図中の4~5)。またオホーツク市の西にある初期鉄器時代のクフトゥイVIII遺跡からは海象の骨が出土(第11図)している(菊池, 2003)。

カムチャツカ半島南端部の遺跡のセイウチの牙は北東岸から運ばれて来たか、もしくはたまたま南下して捕獲されたセイウチの牙だろう。では網走モヨロ貝塚の牙製婦人像や湧別町川西遺跡のクマとシャチの動物

像の素材であるセイウチの牙はどこから手に入ったのだろうか。戦前に根室、函館、最も南では青森県八戸の海面でセイウチが見られたという記録がある。また戦前に北千島のパラムシル島やオンネコタン島の海面でもセイウチが確認されている。しかしながらセイウチは群集性が高く、群れをなして棲息することが他のアザラシやオットセイなどと比べてはるかに多い海獣であり、単独で行動することはない。海獣の研究者によれば、それらのセイウチはクジラに追われて群れからはぐれ、迷走して寒流に乗って南下したのだろうとのことである。ちなみに根室半島のオホーツク文化のトーサンポロ遺跡とオンネモト遺跡からセイウチの牙が出土している(菊池, 2003)。しかしながらセイウチの骨は出土していないから、それらは根室半島で捕獲されたセイウチの牙ではないだろう。では網走、湧別、根室のオホーツク文化の人たちはどこからセイウチの牙を手に入れたのだろうか。

5. 海象の牙の環オホーツク海交易

オホーツク海北岸のナヤハン遺跡の銛先の素材であるセイウチの牙はどこから手に入ったのだろうか。これについて私は、セイウチの棲息域であるカムチャツカ半島北東岸で捕獲されたセイウチの牙が半島を横切って西に運ばれたのであろう、と考えている。この北東岸には古コリャーク文化の遺跡が3か所ある(Vasil'evskij, 1971)。また北東岸には現代もコリャーク民族が居住している。クフトゥイVIII遺跡のセイウチの骨もそのようにして運ばれた骨だろう。こうしてセイウチの牙はオホーツク海北西岸を経由して、サハリンのオホーツク文化の人たちの所にもたらされ、次いで北海道に運ばれて来たのではないだろうか。

スレードニヤ湾の遺跡の北宋銭「皇宋通宝」は上述のように、オホーツク文化の人たちであるニヅフ民族と古コリャーク文化の人たちであるコリャーク民族の接触と交流によってそこにもたらされたと推測される。セイウチの牙はそれとは逆に、コリャーク民族の側からニヅフ民族の側へ渡されたのであろう。両者の交流については上述のように、骨製の銛先・針入れ・円盤状の装飾品にも窺われる。

カムチャツカ半島北東岸から半島を横断し、オホーツク海北岸から北西岸を経て、サハリンに、そして北海道の礼文島にセイウチの牙がもたらされていた。そこから湧別、網走、根室へ運ばれた。遙かなるセイウチの牙の旅である。

しかもセイウチの牙は中国にも知られていた。鞣靴文化の人たちである鞣靴について記した唐の王朝(618~907年)の記録によれば、鞣靴の特産品にセイウチの牙が挙げられている。また唐の領域の營州(今日の遼寧省朝陽市)の納税品にセイウチの牙が挙げられている。また南宋(1127~1279年)の初期の記録や明の王朝(1368~1644年)の記録にもセイウチの牙が出ている。これらのセイウチの牙も、上記のルートを通して運ばれて、中国の人たちに知られたのであろう。

6. おわりに

北海道のオホーツク文化の遺跡から見出された海象の牙製の婦人像や動物像と牙は、このようにオホーツク海北岸からもたらされたと考えることができる。ただし、オホーツク文化の遺跡は北千島にも分布している。したがって、もし北千島のオホーツク文化の人たちがそこでセイウチの牙を手に入れれば、そのような牙が千島列島経由で根室半島のオホーツク文化の人たちの所にもたらされる可能性はあるだろう。もし今後、北千島のオホーツク文化の遺跡からセイウチの牙が発

見されるならば、環オホーツク海交易の実態がより興味深いものとなるだろう。

参考文献

- 大塚和義, 1968: オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物—その信仰形態の再構成への試み—, 物質文化, 11, 21-32.
- 菊池俊彦, 1995: 北東アジア古代文化の研究, 北海道大学図書刊行会, 562pp.
- 菊池俊彦, 2001: 夜叉国へ至る道, 考古学の学際的研究, 昭和堂, 205-245.
- 菊池俊彦, 2003: 環オホーツク海のセイウチの牙交易, 北太平洋の先住民交易と工芸, 思文閣出版, 134-138.
- ジェファソン, T. A., ウェバー, M. A., レザウッド, J. S. 著, 山田格訳, 1999: 海の哺乳類—FAO 種同定ガイド—, NTT 出版, 336pp.
- 西脇昌治, 1965: 鯨類・鰭脚類, 東京大学出版会, 439pp.
- Lebedintsev, A. I., 1990: Drevnie primorskije kuritury Severo-Zapadnovo Priokhot'ya. Leningrad, 260pp.
- Vasil'evskij, R. S., 1971: Proiskhozhdenie i drevnyaya kuritura koryakov, Novosibirsk, 250pp.

306:03 (海水; 熱収支)

2. 東樺太海流と海水

大島 慶一郎*

1. はじめに

オホーツク海は、沿岸結氷を除けば、北半球の海水域の南限である。この海域の海水変動は気候変動にも敏感と考えられ、海水面積の経年変動も非常に大きい。例えば1996年では最大張り出し時でも海水域面積はオホーツク海の50%程度しかなかったが2001年ではほぼ100%近くにまでなった(第1図b, d参照)。一方、オ

ホーツク海は、大気と接した水が北太平洋では唯一海洋中層(300~800 m位)まで運ばれる海域であると考えられている。これは海水が多量に生成されるオホーツク海の北西陸棚域において、海水生成に伴って重い水(高密度陸棚水)が作られることによる。この水は、やがて北太平洋の中層に広がる北太平洋中層水(NPIW)の1成分をなし、大気に接した水という観点からはNPIWの起源水とみなされる。

オホーツク海では、まず11月頃に北西陸棚域で最初の海水生成が起こり、それが広がっていき1月下旬く

* 北海道大学低温科学研究所。

© 2003 日本気象学会